

■谷川士清 国学者、神道家。初めて「日本書紀」全体の注釈書をまとめ、日本初の五十音順国語辞典「和訓栞」を作成。

たにがわことすが

徳川綱吉没・1709＝ 伊勢国安濃郡八町(三重県津市)で、儒学者・名医として知られた谷川義章の長男に生まれる。

和漢三才図会1713＝ 4歳：弟が夭折。

幼時から、父や菩提寺の福蔵寺住職浩天に「四書五経」の手ほどきを受け、

徳川吉宗将軍1716＝ 7歳：

御蔭参流行・1718＝ 9歳：

医業を継ぐべく勉学に励み、

小石川薬園・1721＝12歳：浩天が中御門天皇の綸旨を受けるために上洛するのに従う。

・・・・・・1727＝18歳：

この間、「中臣祓風水草」「日本紀和歌解」「続神皇正統記」などを書写、以後も諸文献を書写しながら研究、

・・・・・・1730＝21歳：京都に遊学、父の紹介で、松岡玄達に入門し、本草学・儒学などを、福井丹波守につき医学を学ぼうち、

・・・・・・1731＝22歳：小笠原家から生花許状を受ける。松岡忠良に垂加神道を学び、ついでその師玉木正英に入門、

享保大飢饉・1732＝23歳：神道許状を受ける。

・・・・・・1733＝24歳：弟が死去。

昆陽蕃諸考・1735＝26歳：玉木正英から許され「歌道筒守三重巻」「玉籤集」を書写。結婚し、\*医論「熱入血室之弁」他二編著した後、父

の催促で帰郷、家塾(洞津谷川塾)と道場(森蔭社)を開き、

・・・・・・1736＝27歳：玉木正英が死去。家業の医者を継ぎ、診療のかたわら講義と著作に励み、多くの弟子を育成して行く。

江船出没始 1739＝30歳：嗣子士逸が誕生。(森蔭社)から、玉木正英の「神代紀藻塩草」「神武紀藻塩草」を刊行。

・・・・・・1741＝32歳：山崎闇斎・玉木正英・松岡玄達の蔵本により、「日本紀」に朱点書き入れを行う。

公事方御定書1742＝33歳：「万葉集」の校註を終わる。五條天神社司蔵板「日本紀」を校正加註改訂するなど、

・・・・・・1743＝34歳：弟が死去。たびたび上洛して「日本紀」に関する文献を研究、

徳川吉宗隠居1745＝36歳：弟が死去。諸家蔵本により、\*「日本紀」の校正を終わる。以後、「日本書紀」本文批評に没頭し、

菅原伝授十・1746＝37歳：長女八十子が誕生。

忠臣蔵・・・・1748＝39歳：「釈日本紀」以後初となる書紀全体の注釈書「日本書紀通証」をほぼまとめ、語源随筆「鋸屑譚」巻1が成る。

・・・・・・1749＝40歳：古世子明神へ「鳴弦弓矢一具」を奉納。

徳川吉宗没・1751＝42歳：「日本書紀通証」全35巻が完成。

・・・・・・1752＝43歳：有栖川職仁親王への和歌入門を許され、以後、詠草の加点を受ける。

山脇東洋解剖1754＝45歳：親王から「十牀和歌」短冊下賜される。

自然真道・1755＝46歳：妻が死去。河北景、正親町実連に序文を依頼して、

・・・・・・1756＝47歳：「日本書紀通証」の印刷開始、

源内物産会・1757＝48歳：有栖川宮へ「日本書紀通証」を献上。

宝暦事件・・・・1758＝49歳：再婚。契沖著「勢語臆断」の異本をひき比べて異同・正誤を証する。

大式政治批判1759＝50歳：次男音弥が誕生。

大岡忠光没・1760＝51歳：蓬萊尚賢が入門。野田で銅鐸が発掘されたことを聞き、入手。

・・・・・・1761＝52歳：長女が結婚。津藩の扶持を受けると、山崎闇斎の墳塋(墓)の補修の資金を出す。

・・・・・・1762＝53歳：山崎闇斎の墳塋完工式に列席し、伊勢で講義。\*「日本書紀通証」刊行し、北野天満宮に奉納。第一巻付録に日本初となる動詞活用表「和語通音」をつけて評判になる。

・・・・・・1763＝54歳：

加賀千代句集1764＝55歳：父が死去。

錦絵始・・・・1765＝56歳：孫士行が誕生。「日本書紀通証」に感銘した本居宣長から、初めて書簡を送られ、書簡の往復が始まり、

忠臣蔵大当り1766＝57歳：「勾玉考」の草稿成る。

明和事件・・・・1767＝58歳：「怪談記野狐名玉」5巻を出版。

久留米藩工事1768＝59歳：建部綾足が来訪。

・・・・・・1769＝60歳：次男音弥が夭折。津藩主にお供し、長谷山に遊ぶ。

・・・・・・1770＝61歳：宣長に会って「古事記伝」稿本を閲読したらしく、自著の「和訓栞」稿本を送り、

御蔭参流行・1771＝62歳：三男元弥も夭折。その後「和訓栞」の改訂版を送り続けて、意見受けるなど、学問上の交流が続く。

田沼意次老中1772＝63歳：「和訓栞」編著につとめる。

大原騒動・・・・1773＝64歳：物産学にも造詣が深く、この年「雲根志」を刊行した木内石亭と親交があり、

解体新書・・・・1774＝65歳：門人により肖像画描かれる。「続大日本史私記」を著し、「勾玉考」を家塾版として出すなどしながら、

黄表紙始・・・・1775＝66歳：日本初の五十音順国語辞典で、93巻82冊、総語数20万8975語におよぶ「和訓栞」の編纂を完了。「通証」「倭訓栞」などの草稿を埋め、反古塚の石碑を建て、碑の背面に「何ゆへに砕きし身ぞと人とはばそれと応へんやまとだましひ」という辞世の心を託す歌を刻し、嗣子士逸が追放されるなか、

雨月物語刊・1776＝67歳：\*「和訓栞」前編の出版準備に専念するうち、没した。